『比較日本文化学研究』第14号（2021）

論　文

頼三樹三郎が頼山陽を偲ぶ詩

任　　萌萌
広島大学大学院文学研究科博士課程後期

The Poems by Rai Mikisaburou in Memory of Rai Sannyou

Ren Mengmeng

Abstract: Rai Mikisaburou is the son of Rai Sanyou, who is famous for his poetry. And he is also the disciple of Yanagawa Seigan, who is one of the representative poets at the end of the Edo period. At present, the literary field of poetry, which Miki is good at, has not been dealt with properly among Japanese literary researchers. The research so far tends to be discussed in comparison with Sanyou, simply labeling it as Miki as a patriot who revere the emperor expel the western barbarians. The influence relationship with Sanyou's poetry will be clarified through a detailed and in-depth analysis of their poetry. Especially, to explore the impact of Miki by analyzing his poems in memory of Sanyou.
Keywords: Rai Mikisaburou Rai Sanyou Poetry

はじめに

頼三樹三郎は頼山陽の息子である。名は醇、字は子春、通称は三樹八郎、三樹三郎あるいは三樹、号は鴨厓、古狂生などである。ここで三樹と略称する。文政８年（1825）５月26日、京都三本木で生まれる。天保３年（1832）、三樹は山陽の弟子、児玉旗山の塾に通ったが、旗山の没後、天保11年（1840）、大坂に下って後藤松陰の塾に寄寓し、かたわら篠崎小竹に学ぶ。天保14年（1843）昌平坂学問所に入学し、傍ら佐藤一斎、菊池五山、梁川星巌らと交わる。弘化３年（1846）昌平阪書生寮退去を命ぜられ、東遊、蝦夷地に赴き、松浦武四郎らと交わる。嘉永２年（1849）正月、帰京する。ペリー来航後、尊皇攘夷論を唱え、星巌、梅田雲浜らと謀り、一橋慶喜の将軍継嗣擁立などを策し、そのため安政の大獄で捕らえられ、安政６年（1859）10月７日に没した。享年は35歳であった。[1]

三樹については、木崎好尚氏の『頼三樹伝』と安藤英男氏の『鴨崖頼三樹

全伝』の伝記研究がある。木崎好尚氏は山陽と三樹父子二人の関係について次のように述べた。「山陽－三樹の父子両先生は、全く大楠公－小楠公との、一つの対照として見られはすまいか。大楠公なくして小楠公は。山陽あらざりせば三樹は。」と、この父にしてこの子ありということを論じた。[2]安藤英男氏は「頼三樹三郎はその父山陽の家学を伝承し、若くして警世の志に充ちていた」と指摘した。[3]尊王攘夷派の志士としての三樹というレッテルを貼って、山陽と比較して論じる傾向がある。安藤英男氏は「三樹には詩人としての天分が豊かで、その詩才においては祖父の春水、父の山陽の名を辱めなかった」と評価する。[4]『先賢遺芳・維新志士遺墨集』には「頼三樹父に肖て詩文を善くす」とある[5]。しかしながら、現今において三樹が得意とした漢詩文という文芸領域について、伝記研究である木崎好尚氏の『頼三樹伝』と安藤英男の『頼三樹三郎』には触れられているが、日本文学研究者の間ではまともに議論されなかった。山陽の詩作は幕末の漢詩界に大きな影響を残した。三樹には父・山陽ゆずりの詩才がある。本稿では、秀でた詩人としての稟質を持つ三樹の漢詩を取り上げ、特にその父・山陽と関わりがある漢詩に着目し、三樹が父・山陽を偲ぶ詩を分析することを通して、父から影響を受けたことを明らかにする。

研究対象として、取り扱う資料は『一日百印百詩』（弘化３年成立、明治44年発行）、額田正三郎『安政三十二家絶句』（鵜飼文庫、安政４年）、『四英獄窓唱和集』（国文学研究資料館、安政６年成立、明治２年刊）、浦生重章編『鴨厓集』（仙台図、梧渓叢書、写本、明治）、添田静淵編『北溟遺珠』（明治27年４月）、木崎好尚氏『頼三樹伝』（今日の問題社、昭和18年）、真田秀吉集録及註『頼三樹詩集』（真田弘、昭和35年）、安藤英男『鴨崖頼三樹全伝』（吟濤社、平成５年）などである。

１、平曲を詠じる詩

天保12年（1841）11月、三樹は「聴人演平語（人の平語を演ずるを聴く）」という七言古詩一篇を作った。原文が存在しないが、木崎好尚氏の指摘によれば、この詩は山陽が好み平家琵琶を思い起こしてのものであるという。[6]

山陽の趣味には、琵琶の平曲[7]があった。それは藤井雪堂（藤井流の祖）より伝えられ、宇治川区先陣などは最も得意であった。山陽の所持する琵琶は「白浪」といった。天保元年（1830）、美濃へ帰るという江馬細香

（1787～1861、名は袁、号は緗夢、女流漢詩人）のために、琵琶を手にし、平曲の一節を細香に語って聞かせた。細香は山陽の批評を付した詩集『湘夢遺稿』に「水西荘書事（水西荘に事を書す）」[8]と題する詩を詠じた。

1　春聞窓雨夜沈沈	春の窓雨を聞きて　夜沈沈
2　自覚簷声撩客心	自ら覚ゆ　簷声　客心を撩す
3　微酔醒時猶未寝	微酔　醒むる時　猶ほ未だ寝ねず
4　琵琶曲裏更坐深	琵琶の曲裏　更に深に坐す

詩意は「窓辺に春雨の音を聞きながら夜は静かにふけてゆき、軒の雨だれが私の旅の心をかき乱すのを感ぜずにはいられない。ほのかな酔はさめましたが、まだ眠りにはつかず、先生（山陽）がお弾きになる琵琶の曲に聞き入って、夜ふけに坐っている」という。

細香は深更まで琵琶の曲を聴かされた一人であった。細香は山陽の女弟子である。文化10年（1813）10月、京都で塾を開いていた山陽が美濃遊歴の途中、大垣に立ち寄り、江馬蘭斎を訪問し、27歳の時、山陽と初めて出会った。これ以来19年間、二人は詩という絆で結ばれた交情を保ってきた。山陽没後、細香は未亡人となった梨影に姉妹のように接し、励ました。遺児となった支峰や三樹三郎は細香を叔母のように慕ったのである。

また、山陽の弟子、児玉旗山[9]（1801～1835）『旗山詩鈔』[10]に「聽山陽先生演平語（山陽先生が平語を演ずるを聴く）」という七言長古詩がある。

1　志賀之山雨融雪	志賀の山　雨　雪を融かし
2　莵川暴漲與天接	莵川は暴漲（ぼうちゃう）して　天と接し
…（中略）…	
27　曲終詞絶意蕭颯	曲終りて詞絶え　意　蕭颯たり
28　我坐倚楹君在搨	我は坐して楹に倚り　君は搨に在り

この詩には山陽が演じた「平家物語」を聴く時、湧き出てくる感覚を描いたのである。以上の例によれば、山陽は琵琶を弾いて、平曲を語り、人に聴かせるのを楽しみとしたことがわかる。

弘化３年（1846）、旅行中の三樹は山陽と知り合った人々を次々訪れる時期

に、「題平経正彈琵琶図（平経正　琵琶を弾く図に題す）」という詩を吟じた。

1　悲歌數曲涙潸潸	悲歌　数曲　涙潸潸たり
2　一槽琵琶月一彎	一槽の琵琶　月　一弯なり
3　薄命縦成絃索絶	薄命　縦に成り　絃索　絶つ
4　千年清怨繞青山	千年の清怨　青山を繞る

平経正は琵琶の名手として知られ、琵琶を愛し、琵琶とともに生きたその人生が琵琶を弾く者にとっては大変魅力的な人物である。平曲では経正は二度主役として出てくる。一度目は「竹生島詣」であり、二度目は「経正都落」である。山陽は琵琶を弾いて平曲を語る趣味がある。この詩は「聴人演平語（人の平語を演ずるを聴く）」という七言古詩と同じように、山陽生前の好みである平家物語を詠じる代わりに、亡父を偲んだと推測できるだろう。

2、思い出を託す詩

天保12年（1841）の７月、三樹は「送關藤藤陰自江戸帰笠岡（関藤藤陰の江戸より笠岡に帰るを送る）」という詩を詠じ、内容は次のようである。

1　君發東都取長途	君東都を発ち　長途を取り
2　偶過津城訪寓居	たまたま津城を過ぎ　寓居を訪ふ
3　別來早已隔九歳	別来　早く已に　九歳を隔ち
4　相見無語只悽如	相見て　語る無く　ただ悽如たり
5　居諸眞是過隙駒	居諸　真に是れ　隙を過ぐ駒なり
6　憶昨君寓鴨川隅	憶う昨　君　鴨川の隅に寓る
7　彦容一逝遂難逐	彦容　一たび逝けば　遂に逐ひ難し
8　吾時童稚失庭趨	吾時に童稚にして　庭趨を失う
9　可慙生來寸長無	慙ぢ可し　生来　寸長無し
10　恰為井蛙跛鼈徒	恰も　井蛙跛鼈の徒と為る
11　吾辱即是先君辱	吾が辱　即ち是れ　先君の辱なり
12　大業不成奈此躬	大業の成らざる　此の躬を奈せん
…（後略）…	

「別來早已隔九歳」は元々山陽の弟子・関藤藤陰と別れてから已に九年ぶり

に隔てたことを指す。実は、山陽は天保３年（1832）９月23日に歿してから今年まで、もう九年であることを暗示する。また、「彦容一逝遂難逐、吾時童稚失庭趨」の意味は「親がいったん逝去すれば遂に従い難しい、私は幼い頃父の教えを失った」という。「庭趨」は庭訓ともいう、家庭での親の教えであり、『論語』季氏[11]に見られる。次の章に拠る。

> 嘗獨立、鯉趨而過庭。曰、學詩乎。對曰、未也。不學詩、無以言也。鯉退而學詩。他日又獨立、鯉趨而過庭。曰、學禮乎。對曰、未也。不學禮、無以立。鯉退而學禮。
> 嘗て独り立てり、鯉（孔子の子）趨りて庭を過ぐ。曰く、『詩を学びたるか』と。対へて曰く、『未だし』と。『詩を学ばざれば、以て言ふこと無し』と。鯉退きて詩を学べり。他日又独り立てり、鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、『礼を学びたるか』と。対へて曰く、『未だし』と。『礼を学ばざれば、以て立つこと無し』と。鯉退きて礼を学べり。

天保３年（1832）、三樹は８歳の時に山陽が歿した。三樹はこの詩句の中で子供の頃にもう父の教えを喪ってしまったことをいうのである。「吾辱即是先君辱、大業不成奈此躬」の意味は「私の恥は即ち亡父・山陽の恥であり、大きな事業にならないとこの身をいかに処置するのか」という。三樹は父・山陽を手本として行動する決心、父の遺志を継ぐ覚悟が見える。

藤陰に別れて４ヶ月後、広島にいる兄の支峰に「寄兄支峰（兄支峰に寄す）」という七絶を寄せた。

1	海山萬里雖途迥	海山　万里　途　迥（はる）なりと雖も
2	知君思郷同吾意	知る　君が郷を思ふは吾が意に同じからんことを
3	何時共歸京洛去	何（いず）れの時か　共に京洛に帰り去って
4	聖護林外看櫻花	聖護林外　桜花を看ん

詩意は「海と山のように遠く隔てるけれど、君が故郷を懐かしくことは私の気持ちと同じだとわかる。いつになったら一緒に京都に帰って、聖護院森の外に花見をしよう」という。結句に出た洛東聖護院の森は山陽遺愛の地である。文政10年（1827）、三樹は父に連れられ、支峰と共にここで花見をした。昔の思い出を踏まえてこの詩を詠じたのは、ここで幼い頃から山陽の面

影を残したからである。

三樹は天保14年（1843）の９月、江戸遊学しはじめて、嘉永２年（1849）の元旦、京寓に帰着した。東遊してからここに至るまで５年４ヶ月である。嘉永２年（1849）２月14日、支峰は入れ代わりに江戸に行き、森田節斎（1811～1868、名は益、字は謙蔵）は送序「頼士剛（支峰）に与ふる書」に三樹のことに言及し、「これを小野寺生に聴く、令弟（三樹）、東遊する数年にして、正月某日を以て帰京すと。その学術文章、必ず大いに進むものあらん、請ふこの書を以てこれを質せよ。」[12]と書いた。

この頃、江馬細香が入京し、山陽の弟子・柘植葛城（1804～1874、字は君績、通称は卓馬、高取藩の医者）も入京した。３月23日、細香、梁川星巌、頼立斎、三樹など葛城に招かれ、席上に三樹は「鴨厓旗店、賦呈君績先生（鴨厓の旗店にて君績先生に賦呈す）」という詩を詠じた。

１　二十餘年舊誼情	二十余年　旧誼の情
２　一亭許我共杯觥	一亭　我を許して　杯觥を共にせらる
３　春灘新漲欄前水	春灘　新に漲る　欄前の水
４　<u>不異家爺曽聽聲</u>	異ならず　家爺　曽て聴くの声に

これは木屋町の旗亭に行われた宴会で詠じた詩である。傍線部の意味は「欄杆の前に流れた水の音は父がかつて聴いた声と同じである」という。

この後、三樹は母・梨影を奉じて、細香と共に嵐山に遊んだ。「與母及細香遊嵐山（母及び細香と嵐山に遊ぶ）」と題する詩を詠じた。

１　侍母嵐山花下筵	母に侍す　嵐山　花下の筵
２　同斟更有女詞僊	同（とも）に斟み　更に　女詞仙有り
３　<u>阿爺拉我如前日</u>	阿爺　我を拉（たづさ）ふこと　前日の如し
４　開落春風二十年	開落　春風　二十年

母と細香と一緒に嵐山で花見をしたとき詠じた詩である。今年は山陽が亡くなった18年目である。傍線部の意味は「父が私を付き添うのは前日のことの如しである」という。

４月１日、三樹は細香のために宇治の万碧楼において、送別の宴を催した。

席上、三樹は山陽舊題「万碧楼」の額を見るにつけて、「與江馬細香飲宇治萬碧樓（江馬細香と宇治の万碧楼に飲む）」という詩を詠じた。

1　金鳳堂空枕菟川	金鳳堂　空しく　菟川に枕(のぞ)み
2　群雄興廢變雲烟	群雄の興廃　変じて雲烟
3　家翁憑弔曾題墨	家翁　憑弔(ひょうてう)　曽て題墨す
4　爛雨荒風已卅年	雨に爛(ただ)れ　風に荒れて　已に卅年

三樹は山陽が残した「万碧楼」の額を見て、父のことを思い起こした。三樹は久しぶりに京都に戻り、周りの親友たちの寄り合いで詩を詠じた。これらの詩には山陽への思い出を託している。

３、次韻詩

弘化３年（1846）４月、昌平坂学問所を退去した三樹は東北行への旅に出た。その途上、会津にいる父の友人である浦上春琴の弟にあたる秋琴先生を訪問して、壁に亡父が以前に秋琴先生に送った山陽の詩が挂かっているのを見たので、その韻に和した「會津訪秋琴老居士（会津に秋琴老居士を訪ふ）」と題する詩を作って献呈した。

1　舊誼誰知三世深	旧誼　誰か知らん　三世の深きを
2　天涯今更聴君琴	天涯　今更に　君が琴を聴く
3　立談休道交情淺	立談　道(い)ふを休(や)めよ　交情浅しと
4　亦似峨洋千古心	亦た似たり　峨洋　千古の心

詩意は「浦上家と頼家との交誼は、父子三世（浦上玉堂、春琴、秋琴。頼山陽、支峰、三樹三郎）にも亘っている。この都遠き奥羽の地で、君が弾く琴を聞こうとは感慨無量なものがある。君と会したのは、今が初めてであるけれども、君が幽玄な琴の音を聞けば、父の代からの交情が偲ばれて、その輪の中に引き込まれてしまう」という。この詩の押韻は次韻の「深、琴、心」で下平十二侵韻であり、父が送った詩の韻に和している。次に挙げる文政12年「送秋琴歸會津」（秋琴　会津に帰るを送る）」の次韻[13]詩である。木崎好尚氏の記録によれば、壁にかかっている父・山陽の詩（初稿）は、以下の通

りである。[14]

1　相遇峨洋楽意深	相遇うて　峨洋　楽意深く
2　阿兄能畫弟能琴	阿兄は画を能くし　弟は琴を能くす
3　千山萬水歸途遠	千山万水　帰途遠し
4　都慰徽中筆底心[15]	都(す)べて慰む　徽中　筆底の心を

両方の詩には「峨洋」という言葉があるが、これは『列子』湯問[16]に拠っている。

> 伯牙善鼓琴、鍾子期善聽。伯牙鼓琴、志在登高山。鍾子期曰、善哉、峨峨兮若泰山。志在流水。鍾子期曰、善哉、洋洋兮若江河。伯牙所念、鍾子期必得之。
> 伯牙善く琴を鼓し、鍾子期善く聴く。伯牙琴を鼓し、志　高山に登るに在り。鍾子期曰く、『善いかな、峨峨として泰山の若し』と。志　流水に在り。鍾子期曰く、『善いかな、洋洋として江河の若し』と。伯牙の念ふ所、鍾子期必ず之を得たり。

互いによく心を知り合った友人を「知音」という。中国においては、伯牙と鍾子期の「知音之交」が、藺相如と廉頗の「刎頸之交」、管仲と鮑叔の「管鮑之交」、劉備・関羽・張飛の「生死之交」などと一緒に論じられる。三樹と山陽の詩では伯牙と鍾子期の故事によって、浦上家との親密な友情を表している。

弘化３年（1846）５月18日、小野寺松洲（1800～1876、通称は主一郎、玄適）の宅に三樹は招かれた。松洲は文政12年（1829）に長崎遊学から帰った途中、京都に山陽を訪ね、山陽から文化14年（1817）の旧作「長崎雑詩」一幅を贈られた。この時、山陽は新しく「小野寺君、適游長崎來別、錄舊游作為贈（小野寺君、適(まさ)に長崎に游び来りて別れ、旧游の作を録して贈と為す）」と題した。詩の内容は次のようである。[17]

1　藁街浮水碧	藁街　水に浮かんで碧(あお)く
2　莎館靠峰青	莎館　峰(みね)に靠(もた)れて青(あお)し
3　山約人烟密	山は人烟を約して密に

4　市籠潮氣腥　　市は潮気を籠(こ)めて腥(なまぐさ)し
5　兒童諳漢語　　児童は漢語を諳(そら)んじ
6　舟楫雜呉艅　　舟楫は呉艅を雑(まじ)ふ
7　誰信囂塵境　　誰か信ぜん　囂塵の境
8　孤吟倒酒餅　　孤吟　酒餅を倒(さかしま)にするを

三樹は亡父の詩幅を見て、その詩の韻に和して、「丙午仲夏、訪玄適老盟、壁有先人詩、因韻賦呈（丙午仲夏、玄適老盟を訪ね、壁に先人の詩有り、因って韻し　賦して呈す）」という詩を作って松洲に示した。詩の内容は次のようである。

1　栽園數竹綠　　園に栽(う)える数竹　緑
2　背郭萬山青　　郭を背にする万山　青し
3　國古文士冨　　国古く　文士冨み
4　海豐滿市腥　　海豊か　満市腥し
5　已探柳津勝　　已に柳津の勝を探り
6　將上松洲艅　　将に松洲の艅を上らんとす
7　詩酒辱先誼　　詩酒　先誼を辱(かたじけな)うし
8　淹留倒幾餅　　淹留　幾餅を倒す

この詩の押韻は次韻の「青、腥、艅、餅」で下平九青韻である。首聯は「緑」と「青」で「竹」と「山」の色を表す。山陽詩の首聯は「碧」と「青」で「水」と「峰」の色を表す。また、両詩の頷聯は同じく人の多さと海の匂いを表現し、頸聯は当時の風物を描いた。尾聯は感情を詠んだ。三樹詩の尾聯「詩酒辱先誼、淹留倒幾餅（詩酒　先誼を辱うし、淹留　幾餅を倒す）」の意味は「申し訳ないが詩とお酒で父親の友情をお祝いして、久しく留まれて数本のお酒を飲んだ」である。山陽詩の尾聯「誰信囂塵境、孤吟倒酒餅（誰か信ぜん囂塵の境、孤吟　酒餅を倒にするを）」は「誰か信じて、にぎやかな街の中に一人でお酒を飲む」ということである。両者は違う時間と空間で同じく酒を飲んで詩を詠じたものである。

おわりに

三樹が８歳の時、父・山陽は亡くなったが、三樹の詩には山陽を偲ぶことがある。山陽が生前に好きなもの、付き合った人、詠じた詩を心にかけて、これらを踏まえて三樹はたくさんの詩を吟じた。三樹は山陽への思い出を託して詠んだ詩に、直接して山陽のことを挙げ、山陽の詩に出てくる詩語を使い、山陽が遺した詩作に次韻して詩を作る。三樹は生前の父から直接薫陶を受けることが少なかったが、父・山陽と関わりがある人と付き合い、父の面影を探すことから、父の気息を求めていることが窺える。また、三樹は父・山陽を手本として行動し、父の遺志を継ぐ覚悟が垣間見える。

この後、両者の漢詩について綿密に分析し、比較対照することを通して、両者は文人としての特質や生き方との関わりを確かめてみようとする。これについては、稿を改めて論じたいと思う。

注

[1] 蒲生重章『近世偉人伝』初編上「頼三樹八郎伝」（青天白日楼、1876年８月、19頁～21頁）、石津灌園『灌園遺藁』巻三「賴處士傳（小林高橋二大夫附）」（石津儀一、1897年８月）、依田学海『談叢』巻一「頼三樹」（吉川半七、1900年10月、５頁～６頁）、岡本韋庵『大日本中興先覚志』巻上「頼三樹三郎」（1901年）、市島謙吉『随筆頼山陽』（早稲田大学出版部、1925年、52頁～61頁）、『殉難錄稿』前篇（宮内省編、吉川弘文館、1933年、21頁～25頁）、『先賢遺芳：維新志士遺墨集』（京都府編纂、更生閣書店、1935年８月、104頁～106頁）、木崎好尚『頼三樹伝』（今日の問題社、1943年11月）、安藤英男『鴨崖頼三樹全伝』（吟濤社、1993年２月）を参照。

[2] 木崎好尚『頼三樹伝』（今日の問題社、1943年11月、４頁）。

[3] 安藤英男『鴨崖頼三樹全伝』（吟濤社、1993年２月、２頁）。

[4] 同上、11頁。

[5]『先賢遺芳：維新志士遺墨集』（京都府編纂、更生閣書店、1935年８月、105頁）。

[6] 前揚注［２］、41頁。

[7]『平家物語』の詞章を琵琶の伴奏で弾き語りする物語の一種。「平家琵琶」、「平語」ともいう。室町時代まで盲人演奏家によって伝承され、江戸時代以降は晴眼者で演奏する者も現れた。

[8] 富士川英郎編『詩集日本漢詩：湘夢遺稿』（汲古書院、1985年10月）。

[9] 児玉旗山：名は慎。字は士敬。通称は三郎。享和元年４月16日生まれ。加賀（石川県）大聖寺藩士児玉双の子。文政９年京都にいき、頼山陽に師事し、のち私塾をひらいた。山陽にみとめられ、その子の三樹三郎をおしえた。天保６年１月26日死去。35歳。

[10]『旗山詩鈔』(『山陽先生書後』の付録に付き、内閣文庫、1836年)。

[11]『論語』(『新釈漢文大系』、明治書院、吉田賢抗、1976年)。

[12] 前揚注［２］、182頁。

[13] 詩歌の応酬や共感のため、作詩の際、全く同一の韻字を同一配列で使うことを次韻という。同一の韻字を自由な配列で使うことを用韻といい、同一の韻部の中の文字を使うことを和韻という。

[14] 前揚注［２］、105頁。

[15] 頼山陽著、木崎好尚・頼成一共編『頼山陽全書・詩集』(頼山陽先生遺蹟顯彰會、1931年３月、642頁）に収録された詩は「帰途」を「離程」、「都慰」を「亦是」にした。

[16]『列子』(『新釈漢文大系』、明治書院、小林信明、1967年)。

[17] 伊藤藹靄『山陽詩鈔新釋』(書芸界、1985年1月、135頁)。